西湖佳話

山岡利一訳

昔、[1]聖人が怪力乱神を語らないと言ったが、不可思議な事実をば妄誕（出鱈目）に近いとして教訓となすに足らないと思った。これはもっともなことである。だが此の広い世の中で荒唐無稽なことはいうに足らないが、ここに稽えねばならぬことがある。事実を無視することができない話がある。しかも西湖の辺に明らかな事実がある。それは[2]雷峰塔である。その始を考えると怪物を鎮めるためにつくられたと言い伝えられて、今日に及んでいる。雷峰塔の夕照は既に西湖十景の一とされている。奇怪だが、根拠がある。諸君は此の雷峰塔は誰が作ったと思うか。昔宋の高宗南渡（王が金人に圧迫されて、高宗の時、汴（河南開封）より臨安（浙江杭州）に遷都したこと）の時、杭州府、過軍橋黒珠巷の町に、ある男がいた、それは許宣という人で[3]末子であった。幼少より両親なく、姉の夫、[4]李慕事の家により、日中は母方の[5]叔父、李商人の阿片店舗にあって[6]掌櫃となり、今年やっと二十二才で、人物も亦マア良いほうである。今年の[7]清明節（毎年四月上旬）に、許宣は宝叔寺に行き祖先を祭り、[8]焼香せねばならぬので、新しい衣服や靴下を取り換えて寺に到り、焼香を済ませてから本堂に行って参拝し、応接間に行き斎をすませ、和尚と別れてあちこち歩いてみようかと思った。丁度[9]四聖観（道帝・岐伯・桑鳩人・玉皇の四聖を祀った道教の殿）に行ったところが、図らずも、雲が西北にわきおこり、霧が東南を領し、早くも微々たる細雨が降って来た。初はすぐにも止むことと思っておったが、図らずも、つぎつぎに、しとしととやって来た。許宣は地上の湿ったのを見て、長らく待ち難いので、已むなく新しい靴と靴下を脱いで、くるくるとひと巻にして腰にくくり着け、跣足になって四聖観の方に走り、船を求めたが、船がないかしらと気になった。ところが忽然と一老人が一隻の船を漕いで、丁度前を通りかかった。許宣はそれを見ると、すぐ、よく知りあいの張阿公であることを知り、喜びに堪えない、急

いで張阿公に「私を湧金門に乗せてくれないか。」と言った。彼の老人は岸に近づいてみると許宣であった。「お前さん雨に遭ったのかい、早く船に乗りな。」許宣が船艙に入ると、張老人は十余丈の水面を漕ぐことができない。その時、岸上で、「私達を乗せて下さい」という声が聞えた。許宣が見ると、それはまあ喪服を着た婦人と黒い着物を着た女の供人で手に一箇の包をささげもっている。二人は舟に乗りたがっている。張老人は急いで船を近づけると、「墓参で雨に遭れた方でしょうね。早く船にお乗りなさい。」彼の婦人は女の供人と船に乗り込んだ。早速許宣に向って丁寧に一通りの挨拶をした。許宣は慌しく立ち上って答礼し、それに、ついで身を半ばおって、「奥さん、船室にお坐りなさい。」と勧めた。彼の婦人は坐席に着くと、許宣はまあ、なんと花のようなすばらしい美人ではないかと思った。かの婦人は頻りに彼に色目を送り、許宣をぬすみしている。

婦人「あなたの姓名は。」許宣は問われて、あわてて答えた。「私は姓は許、名は宣、末子です。」婦人は「お宅は何処ですか。」と問うた。

許宣「家は過軍橋黒珠巷の親戚の阿片を売ってる店に住み込んでいて、商売をしている。」と言い終ると機を逃がさずに尋ねた。許宣「貴女の姓は、お宅は何処ですか。」と尋ねられて、かの婦人は答えて、「白の妹で張官に嫁いだが、不幸にして死んだので、此度この辺りに葬りました。今日は清明節であるので墓参しての帰途、図らずも雨に遭いましたが、偶然この方の船に乗ることができて、さんざんな目に遭わずにすみました。」かれこれ世間話をしている中に湧金門に到着した。上陸しようとした時に、かの婦人は殊更きまり悪るそうに待女をして笑顔で許宣に言わしめた。侍女「早朝、あわてて家を出たので、小使銭を身につけるのを忘れました。船賃を借して下さいませんか。家に帰り次第、間違いなくお返します。」許宣「遠慮なくおつかい下さい。」腰の辺から、お金を取り出して渡して上陸した。上陸はしたものの雨はまだ止みません。日の暮れるのが心配で已むなく、めいめい歩かねばなりません。かの婦人は許宣に向って、「私の家は荐橋の雙茶町の入口ですから、お嫁いでなければ、私の家においで下さい、粗茶をさしあげますし、船賃もお返ししたいから。」許宣「日が暮れたので長らくお邪魔することはできませんから、改めてお邪魔しましょう。」こう言い終ってかの婦人と待女は雨を侵して去った。許宣は急いで湧金門へと向った。人家の軒下つたいに三橋巷の親戚の家に行って傘一本を借りてから、丁度傘をさして走りながら、洋場の辺にさしかかると、ある人が呼ぶ声が突然聞えた。「許さん、一寸お待ち下さい。」急にふりかえると、なんとまあかの婦人はたった一人で茶屋の軒下に立っているではないか、許宣は急ぎ駆いて、「奥さん、どうしてまだ、此処においです

か。」かの婦人「雨が止まないので靴がすっかり湿ってしまったので、待女青児を家に帰らせ、傘と履物とを取りに帰えらしたのです。それにまだ参りません。どうか貴男の傘の下で暫らく合傘して下さいませんか。」許宣「私の家は大変近いから、奥さん、傘をもって帰って下さい。明日私が取りに参りますから。」白婦人「だが、私はよろしい、ただ、あなたが雨に濡れられるのはお気の毒ですから。」……許宣は傘を婦人に与えた。自分は人の軒下に沿って雨を冒して帰った。晩、御飯をたべてから寝台の上にやすんだが、幾度(13)も寝返りを打って、かの婦人の甚だ情あることを思浮べた。許宣は朝早く起きて店に行った。商売をするとはいうものの、その実、ふぬけ同様であって、何(14)にも手につかない。御飯をたべ終ると、口実にかこつけて、家から出た。その足でま直に荐橋喫茶町の入口の方へ赴いて、かの婦人を訪れた。半日探したが、全く誰一人も知った者はいない。丁度あちこちと躊躇っておる中に、年若い待女青児が東の方より来るのを見た。許宣は会って、急いで尋ねて、「ねいさん、あなたは何処にお住いですか。態々傘を取りに来たのです。」青児「旦那さん、私についていらっしゃい。」許宣を案内した。いくばくもいかぬ中に「此処ですよ。」と言った。許宣が見ると、まあ大きな楼房(15)でその向側が府上(16)のお座敷である。青児は門に入って、「旦那さん、此の家の中へ入っておかけなさい。」許宣は案内に従って中座敷に入った。青児は奥に向って、低声で、「旦那さんが来ておられますよ。」婦人はそれに答えて、「許旦那さんを中にお通し申して、お茶をさし上げなさいよ。」許宣は逡巡していたが、入る気になれず、青児は再び促して、「中に入っても差支えはありませんよ。」許宣は中に入った。ただ通って行く道は四枚扉の板戸の窓で中央の入口に一幅の黒い簾がかけてある。簾をあげて入って行った。婦人は出迎えに出てきて丁寧に挨拶して、「夜来の雨に遭って大変旦那様に色々お世話になり、どうも有難うございます。」許宣「これ程のことをなんのお礼を言う必要がありましょうか。」一方お茶をさしあげた。許宣はそこで帰ろうとすると、その間にもう青児は手廻り早く精進料理を捧げて来て、引き留めてお酒のお酌をしようとする。許宣は誠に感謝に堪えないのだが、御馳走になるわけにはゆきませんとお断りしたが、ほぼ五六杯飲んでから椅子から身を起して、「もう日が暮れますから、お暇乞いをしましょう」白婦人「何にも無いのに、あなたを無理に引き止めるわけにはまいりませんのに、ところがあなたの傘をば私の親戚の者がお借りしてゆきました、どうか、もう少しおかけ下さい。使いの者にとってこさしますから。」許宣「日が暮れたので、此れ以上待つことができませんから。」白婦人「もうこれ以上待つことできませんの。お願いですからこの傘は明日又とりに来て下さいません。」許宣「宜しうございます。」有難うとお礼を

言ってすぐに出て行った。翌日になってから店で少し商売をしていると、心がむずむずしておさまらない。そこで用事があると口実を設け、密かにかの婦人の家に行って傘を求めた。婦人は彼がやって来たのを見た。再び酒を用意して引き止めて飲ましめた。許宣「一本の破れ傘のためにどうして、御馳走になれましょうか。」白婦人「酒を飲むことは情を求めることです。もともと傘のためではありません。もう一杯飲んでも差し支えないではありませんか。まだ話がありますから。」許宣は数杯飲んでから、「奥さん、お話があるのですか。」と尋ねた。問われてもう一杯酌をして、親ら許宣の目の前に笑いながら、次のように言った。「旦那さまのような誠実な方には嘘は申しません。私は夫を失ってから寡婦になった。あなたとは必ず前世の因縁があり、先に船中で一目見ると多情を覚えた。あなたが若し誤って愛して下さるならば、どうか、立派な媒酌人を求めて夫婦の関係を結んで同棲するようにして下さいませんか。」許宣は聞いて心から嬉しく思ったが、考えてみれば李将仕の家で商売しており、生活が不安定であり、どうして嫁をとることができましょうか。煩悶して未だ返事しない。婦人は返事をしないのを見て、「旦那さま話があるなら、そのまま言っても差支えないじゃありませんか。何故返事をなさらないの。」許宣は、そこで「あなたの高情をうけ、感激に堪えません。だが自分は雀樞で、どうも手許不如意で、仔細に考えてみると、実に貴女の仰せに従いにくい。」白婦人「あなたが心から結婚を願わないなら、此の上、強いてはとは言いませんが、若し少しでも気があれば、私の財布の中に余財がありますから、御心配には及びません。」そこで青児にいいつけて、「お前行って少し銀を持っておいで。」青児は急いで奥の部屋に入って一包をとり出して奥さんに渡した。婦人は受取ってから許宣に渡して、「取り敢えず、貴男、使って下さい。さらに入用ならば、またお取りにこられても差支えありません。」許宣は両手にてそれを受けて、開けると、これはまた五十両の馬蹄銀貨[17]である。満面に笑をたたえ、ポケットの中に入れて婦人に答えて、「万事[18]仕度が整った上で御返事に参りましょう。」許宣は立ち上って暇乞いをした。青児は傘を許宣に渡した。許宣は真直に家に帰った。第一にお金をキチンとしまい、傘を返してから始めて床についた。

翌朝早く起きていくらかの細かい銀貨を取出して、鶏鵝魚肉の類や各種の果物を買い、その上、好い酒一樽を求めて兄や姉を招待して食事した。李慕事は舅子（妻の兄弟、許宣を指す）が酒を準備して私達を招待したいということを聞いて一驚して言った。「今日は何んでお前は散[19]財するのか。」許宣「用事があるので兄さんや姉さんに御尽力をお願いしたいのです。」李慕事「用事とはどんなことか。」許宣「まあ二三杯お飲みなさい。」一同のものに無理やりに席につけた。四五杯飲ん

でから、李幕事は再三その理由を問うた。許宣は始めて言った。「私は兄さんや姉さんのお世話になってここまでになった。まことになんのお礼の申しようもありません。ところが、今、縁談があり、それは私にとって恰好の結婚でありますので、既に口約しておりますから十分な骨折りは要りません。唯私は父母がなく、兄さんや姉さんは私のためにどうか、その結婚をうまく成立するように、お願いしたいのです。」李幕事夫婦はそれを聞いてから自分達に結婚の金を出させようとの魂胆であると思い冷淡な返答をして、「結婚は一大事だから、よくよくゆっくりと相談する必要があるから、今日はマア酒を御馳走になろう。」それぞれ家路についた。それから何んの返答もせずして二三日はすぎた。許宣はそれ以上待つことができないので姉さんに催促して、「姉さんもうお話して下さいましたか。」姉「まだだよ。」許宣「何んで相談してくれないのですか。」姉「夫は毎日用事があって忙しいので意見を聞くことができませんので。」許宣「アア、わかりました。乗り気にならないのですね。貴女は唯、私が兄さんにお金をださせるのを恐れておるのでしょうかしら。」そこで許宣は袖の中から大きな馬蹄銀貨を取り出して姉さんに手渡してから、許宣「私は結納金[20]がありますし、兄さんは、一寸お世話して下されば、よいのですが。」姉はその銀貨を見て笑って、「まあ、お前は叔父さんの家で商売していてその中からお金を溜めたんですね。よくよくお嫁さんが欲しかったのですね。わたしは暫く此処にいて兄さんの帰えられるのを待ってお前に代って頼んで上げましょう。」暫くして李幕事は帰ってきた。妻は許宣の銀貨をば夫に手渡して、「弟が結婚したがっています。もともと、お金を自分で持っております。唯、貴男とわたしとの同意を求めています。どうか早く世話してやって下さい。」李幕事は銀貨を手に受取って何回ともなく、繰返してお金の刻印を詳しく見て大声で叫んだ。「大変なことになったもんだ。私達一族の者の命はこの銀貨のために、とられねばならぬことになった。」妻「馬鹿げた話[21]です。それは唯、一個の銀貨にすぎない。何んの恐しいことがありましょうか。」李幕事「お前はどうしてわかろうか。只今郡太尉の倉庫の中に封印して錠前はそのままで五十錠の大銀貨が消えた。正に臨安府に賊を捉えるように命令し、緊急警戒して、オサオサ怠りない。全く手がかりがない。盗賊を捕えるため、刻印枚数を写し、賊を捉えた者には賞金五十両を与える。事情を知って告げなかた者及び賊を隠匿したものは一族全部を遠く流罪として軍役に当てると掲示した。この銀貨は上の記号と同じで、若し隠匿して知らさずに後日人に訴え出られたならば大罪に連坐せねばならぬ。」妻は聞いてビックリしてガタガタ[23]と震えた。「どうでしょうか。あの子は盗んで来たのでしょうか。それとも借りて来たのでしょうか。ところでどんな処分をうけるの

でしょうか。」李幕事「濃はそれを彼が借りたものか、盗んだものか、知らぬ。それは自業自得だ。しかし私は一家を害されることは望まない。此の銀貨をば持って臨安府に行って訴えよう。臨安府の韓大尹（長官）は銀貨を見て、これはほんものだ。正賊許宣を捕えるために役人を遣した。間もなく許宣は捕えられた。法廷にまで連れてこられた。韓大尹は一喝して、「郡太尉の庫中の錠前を動かさずに、大銀五十錠が見えなくなった。現在李幕事は一錠を訴え出て此処にある。これはお前のものか。既に一錠を所持している以上、後の残り四十九錠は何処にあるか。お前は封鎖を動かさずして能く庫の銀貨を偸み出したものだね。きっとお前は妖人だ。早く白状せよ。」一方牢獄[24]の小役人や捕手に命じて妖術者に犬豚の血を用意させ、重き拷問[25]の責道具を用意して控えている。許宣はあわてて弁明した。「私は妖人ではない。正直に申しますから暫くお待ち下さい。舟中で白婦人に出遭い、傘を借りたのを取りに行き、そこで酒を御馳走になり、結婚を求められ金を借りたことをば、こまごまと述べた。韓大尹「白婦人はそもそもどんな人間か、住所は何処か。」許宣「彼女は白の妹で現在は孝橋嬰茶坊巷口の秀王廟対門の黒い格のある高く上った部屋にいる。」韓大尹はそこで捕り手を何立を遣わし、許宣について嬰茶坊巷に犯人白婦人を裁判にかけるために捕えに行った。何立は許宣を護送した。又一組の雑役人をつれ、近道した。黒い格の前に来てみると、豈はからんや、此は住人のない淋しい家である。直ちに組頭や左右の隣家の人人を呼び出して尋ねたが、共に言うには、「この家は毛警官の旧屋で五六年前、一家すべて流行病で死に絶えた。日中でも常に幽霊が出て物を買いに出る。誰がそれで住む気になれようか。此の辺り一向白姓の婦人はおりません。」何立は許宣に尋ねた。「お前は家を見違えたらいかんぞ。」許宣は此の時、一筋の光を見て驚いて茫然自失した。明らかに四五日でどうしてもこんなに荒れるのか。何立「すでに此処ときまった以上門を開いて進め。」地方頭に手を下し門を開かす。一ゆれの後、中は森閑として淋しい。一向人影もない。衆人は一階二階と上り、真直に入ったが、一向に足跡もない。真直に最後の階上の大部屋に入ると遠くに花のような玉に似た白衣を着た婦人が床の上に腰を掛けているのが見える。衆人はそれを見た。人か幽霊かわからぬので皆立ちどまった。独り何立は役人であるので叫んで、「お前は白と想うが、府中韓長官の令状を出してここに持っている。お前を連れて行く。銀貨のことで許宣と対質することを求める。」かの婦人は身動きさえしない。声も出さない何立はどうすることもできない。肝を大きくして大衆の前で彼女の面前に至ると一声響きわたった。即ち青天の霹靂に似ている。大衆は辟易した。響が静まってから再び床に近づいてみれば、唯恍々として光っている。一塊りの銀貨が現れた

が、反対に婦人は見当らない。銀貨の数を数えてみると丁度四十九錠である。何立はその足で衆人をして、銀貨を担がさして、臨安府裁判所に持って行かしめた。一錠一錠とはっきりと手渡し、見たところの事をこまごまと申上げた。韓長官は聞いてから、「判断すると、当然妖人が祟をしている。衆人には関係がない。」地方頭は近所のものは尽く無罪となして家に帰らしめた。許宣は法律の規定によらず処分すべではない。牢城軍にある兵営に流罪とした。銀貨は数通り邵太尉に返還した。その時、太尉は賞金五十両を李幕事に与えた。事件はここでやっと落着した。ところが李幕事は許宣を起訴したことに拠って賞金五十両を貰った。その上に許宣は自分の連絡によって、牢城に流罪となったので、心中甚だ気の毒に思った。そこで賞として与えられた銀貨をば、総べて許宣に与え旅費となし、更に李将仕をして、彼に二通の封書を与えた。一通は押司院、范院長に交付し、一通は吉利橋下で旅館を開いている主人に送った。許宣は痛哭してから、兄や姉に辞別した。護送の役人と船に乗り、蘇州城牢営に到着するや二封書をば范院長と王主人に出した。

二人の尽力のお蔭で彼は上役や下役の役人に金を与えて返書を願った。護送の役人は去った。許宣は毫も苦しまなかった。王主人の楼上でゆっくりと休憩し、終日独りで無聊で苦しんだ。許宣は蘇州に居ること半年甚だ寂寞を感じた。ところが突然或日王主人が部屋に入って来た。彼は「外に轎がとまっている、一人の娘が乗っているではないか。一人の侍女を連れて、貴男をお尋ねになっている。」と告げた。許宣はビックリして、誰が私を尋ねに来たかしらと思って、慌てて門のところに行ってみると、正しく白婦人と青児であった。一目見るや、憤慨し、苦悩しながら、声をつづけて叫んで、「憎い野郎め、お前が官銀を盗んでから、わしは冤罪を被り流罪となって、幾多の苦しみを嘗めた。今やそのために呉城に送られた。お前はここまで来て何をしようと思うのか。」白婦人「貴男は私を変な奴と誤解にならぬようにして下さい。私は今貴男のために弁解しようと思っています。」王主人は二人が門前でかれこれと言っているのを見て、恐らく人が見たらみっともないと思って、「折角御遠方からいらっしゃったのですから。」と言うと、白婦人はその機に乗じて中に入ろうとした。ところが許宣はからだを横にして引き止めて、「あいつは妖怪ですから中に入れてはならない。」王主人は白婦人をしけじげと看て、笑いながら、「世の中に妖怪などおりません。口に出して人を謗ってはなりません。どうぞ、お入りになっても構いません。」白婦人は中に入って先づ主人と主婦に対面の挨拶をして、「私は既に身を貴男に許したので私の夫です。まさか貴男に害を与えるようなことがありましょうか。銀貨をあなたに与えたのは好意の表れであり、誰が禍を与えようと思いましょうか。万一銀貨の来歴の

不明を言うなら、その罪は皆先夫にあります。私は女の身でどうして知っていましょうか。私は只の女で、何の妖怪でありましょうか。恐らく貴男は誤って怨んでおられるのでしょう。態々来て、貴男に弁明してから去るのが本望です。」許宣「これはそれで宜しい。ところが役人を派遣してお前を捕えに来た時、床に坐って大音響をたてて見えなくなった。どうして妖怪でなかろうか。」白婦人は笑って、「あの大音響は侍女青児の大きな竹片で板壁を打って衆人を嚇した。そこで衆人は私を妖怪としたのです。一同のものは長時間してから床の後から遁れ去った。皆恐れてやって来なかったが、銀貨がそこに発現した。人々は銀貨の方に気が向いたので私は遁れることができた。それから華蔵寺前の叔母の家にいた。ところが貴男が流罪になって此処におられるのを聞いて旅費を持って貴男に面会のために来たのです。更に貴男の結婚の便りを求めて来て、意外にも貴男に私が妖怪であると疑われた。私はお暇致しましょう。」身を起して走り出した。王主人は急いで留めて、「遠方から来られたから、仮令帰えるにしても、愚妻（王主人の妻）のところで数日お留りなさい。」白婦人は聞き入れようとはしない。かくするうちに侍女青児を見て、「御主人の好意により再三滞在を勧められたから、白婦人は兎に角二三日留って再び相談致しましょう。まして私は以前は許宣の許嫁であり、今日は無理に拒否される。」白婦人はつづいて、「男を追って此処まで来ながら嫁われるのは今更恥づかしい。(27)(28)まさか私は嫁われながら是非とも忍んで此処におるなんてことができましょうか。」主人主婦「最初、嘗て許しあった仲で、どうして気が変ろうか、好き日を選んで此処で末長き結婚をなさい。」許宣は初は真に妖怪と思ったが、今彼女の巧な言葉で奇麗に了解することができて全く疑わなかった。更に彼女の美貌を見て殊に心の動くのを覚えた。主人夫婦の勧めにより喜んで結婚する気になった。白婦人の懐中は充分であった。彼女はかれこれと喜んでいる。結婚して後、白婦人は人を迷わす手段を放棄し、許宣は邪術で丸めこまれて神仙に遭うたようであった。そこで彼は深く結婚の遅きを悔いた。歳月矢の如く忽ち半年経った。或日のこと、これは二月半のことである。許宣は数人の友と一緒に臥仏寺に到り涅槃像を見て、門前に到り一道士のそこで薬を売り符水を施しているのを見た。許宣はひょっこり前の方へ行ってみると、かの道人一目見るなりびっくりして言った。「あなたの頭上に不吉の悪気がある。これはきっと妖怪がお前さんの身につき纏っている。其の害は浅くないから、用心せねばならぬ。」許宣はもともと人を疑う癖があり、一度道士の言をきくや忽ち我知らず丁寧に地に伏せ手を合せてお願いした。彼の道士は彼に霊符二つ与え、彼に真夜中に一つ焼き自分の髪の中に一つ隠してお

けと言いつけた。許宣は家に帰って急いで一つをば、密かに頭髪の中に入れて置き、もう一つは真夜中に到るを待って焼いた。夜中になると白婦人は忽ち歎息して、「私は貴男と久しく夫婦である。尚少しも恩愛がない。貴男は却って人の言葉を信じて、夜半三更お守りを焼いて、私を呪で殺そうとしている。貴君はお守りを焼いたではないか。」許宣は彼女に素破抜れて焼きにくかった。白婦人はお守りを横取りして焙で焼いた。全く何等の影響はない。白婦人は笑って、「どうですか、私は若し妖怪であるなら、きっと本性を現わすでしょうに。」許宣「これは私の与り知るとこではない。それは臥仏寺の遍歴道士の言ったことだ。」白婦人「彼は既に私を妖怪と言ったからには私は明日貴男を伴って行きましょう。取り敢えず彼を怪形に変じさせて貴男に見せましょう。」翌日青児に言いつけて住家の番をさせて夫妻二人寺の前までやって来てみると、一団の人が道士を取り囲んで丁度そこで符水を撒いておるではないか。白婦人は抜き足、さし足でそこに行って大喝一声して、「お前は唯の無学無術の方士にすぎない。何がわかるか。どうして無茶出鱈目を言って呪を立てて妄言して大衆を惑わすか。」そこで道士はだしぬけに聞えたので一驚を吃した。彼女をば一目見ると、彼女の顔色が怪しいので、彼女の来歴の正しくないのを知り、返答して、「私のやっておるのは五雷天心正法である。仮令甚しい妖怪でも、私の符水を吃したならば、忽ち形を現わす。お前は唯の妖女だ。どうして私の符水を飲まないのか。」白婦人は聞いて笑って、「皆さんは証人になって下さい。貴男は呪をきって私に食わして不さい。」「私は吃して御覧に入れよう。」道士は急いで昼符一つ白婦人に与えた。白婦人は慌てず騒がず、それを受けとって手の中でもんで口の中にほり込んで水で飲みました。何時までもニコニコ笑って一向に変化しない。観ている人は目茶苦茶に道士をば罵り出して、「随分出鱈目を言うね。こんな娘さんが、どうして妖怪であると言うか。」道士が罵られて目をみはっているが、口がきかれないで言わうとしても一句も言うことはできぬ。白婦人「彼は行脚僧でありながら、貴婦人を欺罔しているが怪しかろう。当然彼を罰して地獄におとして極刑にすべきである。今皆様の顔に免じて一縄吊りさげておこう。」一方口中で何か少し念じた。かの道士を見ると人が縛っておるかのように縛りつけられて漸次縮って一かたまりとなり、漸次高く空中に吊るした。ウンウンと唸った。大衆は此を見て驚いて不思議と思うた。許宣までもポカンとした。白婦人「もし地方に影響が及ばないならば、土地の騒ぎとならないならば）一年は吊って置かねばならぬのだが。」軽く息を吹き出したところ、かの道士は地上に降りて来た。かの道士が地に降りることができたので、父母がもう二本の足をも附けておいて異れなかった事を恨んでいるかのように飛ぶようにして逃げ

た。衆人はどっと興の声をあげて去った。夫婦はもと通りに家に帰った。暫くたって、四月初、八仏の生日、許宣は気ののりして承天寺にて仏会を見に行こうと思った。白婦人「何か面白いものがありますか、貴男が行きたいと思えば、行っていらっしゃい。」二枚の新しい着物を取出して着かえさした。上の方に一つの瑚瑚のおもりがある一本の扇子を取出して、彼のために、あおがしめた。「彼に早くお帰りなさい。心配をかけぬように。」と言った。許宣は承知した。そこで一着の中華服を着けて得意になって体を振って、承天寺に至ってゆっくりと遊んだ。耳の中に人々が口やかましく口口に話しているのが聞えてくる。周将仕の質倉の中の沢山の金珠衣服が見えなくなった。只今捕手が犯人を逮捕手配中である。許宣は一向心にかけていない。彼が焼香している男女と遊んでいたところが、図らずも捕手は気をつけて、許宣の着ているものや手につけておるものを見て、紛失届と符合しておるのがわかると許宣の前に潜って近づいて、「あなたの扇子を見せて下さいませんか。」許宣はそれが探求されている品とは気づかず、そのまま扇子をば役人に渡した。役人が真の賍物であるとみてから大声で叫んで、「賊はおった、早くおさえつけてしまえ。」大勢の者が皆揃うて許宣をば一つかみにして捕えた。許宣は捕えられ、再三言いわけをしたが、大衆はどうしても彼の言訳を聞かない。府尹がたまたま法廷に出坐しておったので、大衆は法廷まで護送して来た。府尹「身につけている衣服・扇子は実物である以上はその外の金珠賍物は今何処にあるのか、事実によって述べみよ。」拷問千杖の処罰を受けずにすみ、許宣は「私の着ている着物は皆、妻の白氏の嫁入の時、持って来たもので、どうして盗人と言われましょうか。相公はどうか明徳もて詳かに御調べ願いたい。」と申上げた。府尹「お前は甚だ出鱈目を言うな。獲物が既に書き付とあっている以上、どうして大胆にも妻にかこつけて、罰を逃れようとするのか、なお、お前の妻子は今何処におるか。許宣「現在、吉利橋の王主人の二階におります。」府尹は早速捕り手をさしむけ、許宣を引き連れて、白婦人をば捕えて調べた。大衆は興声と共に店に乗り込んだ。王主人は見て驚いて「何をなさるのですかと。」許宣「白婦人が私を陥れたので、ただ彼女を捕えに来たのですと。」王主人「白婦人は今もう二階におらない。あなたが承天寺からまだお帰りにならないので彼女は青児と一緒に寺の前まで探しに行かれたがまだ帰らないのです。」捕手は白婦人の不在と言われて王主人を捕縛して府役所に帰った。府尹「婦人が夫を尋ねに行っているから、あまり遠くには行っておるまい、そこで王主人を捕えさせました。」許宣は獄屋に投ぜられ、白氏も捕えられた。審判して罪を定めようとした。此時、周将仕は許宣が捕えられたことをみて、法廷[31]に立って処罰の軽くなるように哀願した。俄かに家人が来て言うに、

金珠は皆倉の中の空箱にあったと報告した。周将仕は急いで家に帰ってみると、果して皆あった。唯扇子と鍾りとが見付からない。周将仕「扇子はヒョットしたら外のものがあるだろう。これは明かに許宣に冤罪をきせさせた。」そこで役所に至り、こっそりと係りの役人に耳うちをした。或る事情があって彼を釈放した。許宣はそこで再び罪に問われず、場所が良くないので改めて鎮江に流すことにした。許宣が行こうとすると丁度杭州邵太尉は李幕事を蘇州に出張を命じた。李幕事は許宣を心配して王主人の家に来て彼と面会した。改めて流されたことを聞いた。「鎮江の李克用は私の従兄で針子橋に住んでいて阿片の材料を売っている。私は紹介状をお前にやるから、それを差し出せ、そうすれば、何かの為になるだろう。」役人と同行して数日ならずして鎮江に到って李克用の家を尋ねて面会した。紹介状を差し出して、「私は杭州の李幕事の妻の弟で、姉の夫がここに紹介状をこのように書いてくれたから、何卒御愛護の程お願いします。李克用はそれを見てから、二人の役人に「どうか入って御飯をお上り下さい。」一方番頭を遣わして同じ役所に行かした。いくらかのお金を使って保釈してもらって家に帰った。役人は返事を受取って帰った。許宣は家に帰り、克用にお礼を申した。克用は紹介状を見て許宣が元来阿片店の番頭であるので彼を店に留めて商売させるように言いきかせた。幾日かして、彼が充分商売に精通しているのを見て甚だ喜んだ。許宣は店の者たちが嫉妬するを恐れて、彼等を酒店に連れて行き感情を疎通した。店の者たちは食べ終って散開した。許宣は酒代を払って門を出たが、余程酔っていることに気がついた。人につっかかる程であった。唯うつむきながら屋檐に沿うて歩いて来た。図らずも或家の二階の窓をおしあけて熨斗の灰を揺いたので頭一ぱい灰をかぶった。許宣は立止って罵って、「どこの馬鹿め、よもや私を盲にするのではあるまいなあ。」婦人が階下に降りて来て、「あなた、罵るのをおやめなさい。私のちょっとした過失です。」許宣が頭をあげて見ると、別人にあらず正しく白婦人ではないか。思わず怒心頭に発して罵りて、「お前は妖婦だ。かさねて私を非常に苦しませた。重大なる訴訟を二度もくわされた。

蘇州で影さえも見えず、こんなところに身を避けるようになったのだなあ。ひとたび住居を見つけた以上、今日は此の侭にはすまさないぞ。」白婦人はわざと笑顔で「一夜の夫婦の契は百夜の情愛と言うが、貴男はいら立つに及ばない。更に私の説明を聞きなさい。万一誤りがあったら、それから怒っても遅くはない。先日の衣服扇子すべて私の先夫の遺品である。決して賊品でない。貴男との情愛が深いので貴男の身につけさせたのである。人を誤認させようなどと私は思いましょうか。

これ皆、貴男の年廻りが悪いのであって、私には何の関係もない。 許宣「私が家に帰ってお前を尋ねた時、どうしていなかったか。」白婦人「私は寺に行って貴男を尋ねたが、貴男が既に捕えられたのを聞き知り、屹度、私はまきぞえをくって不面目を被るのではなかろうかと思い、青児に綿布を運ぶ船を求めて便乗させた。この叔父の家にきて暫く留って、そうすれば消息を知ることができよう。私は既に貴男に嫁いだ以上、生きて許家の人となり、死んて許家の鬼となって貴男からは離れません。今幸に逢い、譬え私を邪魔物にしようとも私は貴男を離さない。」許宣は一たび甘いことを言われて、そのため、腹一杯の怒りは消えたが、「お前は此処に住んでいて、まさか私を尋ねていたとは言えまい。」白婦人「貴男を尋ねずして誰を尋ねましょう。それに早く二階にお上りにならないのですか。」許宣は思い直して遂にグッタリとして彼女について二階へ上って留り込んだ。許宣は白婦人の家で一夜とまった。相睦まじあうことは初と同じである。これまでと同じく自分の住所に落ちついて日を送っていた。十幾日かたつと婦人は数十両の銀貨を持ち出して許宣に与えた。許宣は埠頭で小さい薬店を開らかした。許宣は李克用に話したが、克用は無理にとどめなかった。許宣は開店以来一日一日と隆盛となり、七月七日の英烈龍王[32]の誕生日であった。許宣はお参りしようとし、白婦人は再三彼に決して行ってはならないと忠告した。彼がどうしても行こうとするのを見ると、是非行こうとおっしゃるならば、仕方がないから、こうしなさい。「本殿の方をあちこちと歩きなさい。決して僧の住んでいる家の中へ行って何かと話してはならない。恐らく僧は貴男につき纏うて布施をねだるかもわかりません。」許宣「承知した。お前の言う通りにするだけだ。」その足で楊子江に出て船を備った。真直に金山寺に行った。龍王堂に到り、焼香してから見物した。何気なくヒョッコリと方丈の方に歩いて行った。沢山の和尚が環になってその中で説教を聞いている様子が見受けられた。その時妻の言ったことを思い出して急いで退出したが避ける暇なく早くも座上の大和尚は彼を見つけた。「此の男は顔中妖気が満ちている。そこで侍者に言いつけて彼をばよばせて来て話をさせた。侍者が降りて叫んだ時、許宣はすでに方丈から遠ざかって行った。大和尚が彼を呼んでも聞えないとみるや、自ら禅杖を提げて後をおっかけて行った。お寺の前まで追っかけて来た時、皆楊子江を渡ろうとしているのを見た。風は激しい。和尚は門外にあって待っていた。楊子江の真中に一叟の小船が現れた。飛ぶがように早くやって来た。皆驚いて、「こんな小舟がどうして大風を恐れずやって来たのだろうか。」快速である。此時、許宣は立って衆人中にあり、頭をもたげて見た、図らずも来た小舟には白婦人と青児とがその上に立っているではないか。許宣は驚いた。彼

等の来たわけを問わんとするが早いか、白婦人は遠くから呼んで、「貴男、風が激しい。私はただ貴男を迎えに来た。早く舟に乗って下さい。」許宣は一時その声を聞いて、どうも仕方がなかった。丁度その舟に乗ろうとした時に和尚は図らずもその船の正体を見抜いて大喝一声して、「妖怪め、お前は此処に来て、どうするつもりか。」まさに杖を挙げて打たんとした。白婦人と青児と船もろとも水底に転覆させたのを見た。許宣は驚いて人に「此の禪師は誰か。」と問うと、此の禪師を知っている者があって、「此の方は法海禪師である。当今の活仏に数えられている。」そう言い終らないのに、彼の禪師は待者に許宣を呼びに行かして、「お前はどこで此の妖物に遇ったか。」と問うた。許宣は問われて一部始終話した。禪師「これは宿緑で汝は慾念甚だ深いので再三再四迷うて悟らず、今汝の災難がすでにのがれたのはよろこばしい。早く杭州に帰って終身立命しなさい。もし再び来り繞うならば、汝は湖南浄慈寺に来て私を尋ねなさい。詩四句がある。決して之を忘れてはならない。」

これもと妖怪の婦人の変ぜしもの
西湖岸のほとりに嬌を売る
汝は慾深きため、彼女の計に遇う
患あらば湖南の老僧を見よ

許宣は禪師にお礼を申すと急いで家に帰った。

果して白婦人と青児は見当らない。翌朝、針子橋の李克用の家に到り、此の事をば一通り告げた。李克用は許宣を彼の家に転宅させ、暫く留まるようにした。数日もたたないうちに、朝廷より恩赦がきて十悪大罪は除かれ、すっかり釈放された。許宣は赦されたのを聞き心から喜んだ。すぐその足で李克用に謝して杭州に帰った。家に帰り兄や姉に会って丁寧に挨拶した。李慕邪「二度の訴訟で私も色々心配して尽力しました。お前も甚だ不人情だ。どうして妻を娶ったなら、ホンの一筆の便りをくれないか。これはどういう訳か。」許宣「私は何も妻を娶ったことはない。兄さん此の話はどこから出たのか。」と言い終るや、姉は白婦人と青児を内から連れて出て来て「妻を娶ることは好いことだ。何も隠くす必要はないではないか。これはお前の妻ではないか。」と言った。許宣は驚いて、急いで姉を呼んで、「彼女は妖精である、決して彼女を信じてはならない。」白婦人「私は貴男と夫婦で一回も不満なことをしてはおらぬ。何故他人の言葉をきくのか。どうして私と仲睦じくないのか。女たるものが既に貴男に嫁したのに私を何処へ行かせるのか。」と言いながら嗚咽した。許宣は慌てて李慕邪の外出を大声でとめて、これまでの次第をこまごまと話した。「此の婦人は真実の蛇精で、こいつをほかへ追いやる方法はなかろうか。」李慕邪「もし果してこいつが蛇なら、何んでもない。白馬廟前に蛇捕り鏡さんがいる、極めて

蛇を捕えるのが上手だ。一緒に行こう、蛇を捕えさえすればよい。」二人が行った時、丁度戴さんが門前に立っているのにあって尋ねた。「何の御用ですか。」李慕事「拙宅に大蛇がおり、どうか捕えて欲しい。先づ銀貨一両を差し上げよう。蛇を捕えてから別にお礼を致しましょう。」戴さんは銀貨を受けて住所を問うて、「お二人はどうか先に帰って下さい。私は直ぐ後から行きましょう。」硫黄と煮た薬水を入れた瓶とをつつんで、直ぐに李家に行った。許宣は迎えて彼を奥の方の部屋へ行って捕えることを指示した。戴さんは家の門前にやって来て門が緊く閉じているのがわかった。そこで門を叩いて「人がここにいるのか。」内の方から問うて「あなたは誰れか、奥にやってくるのは、」戴「私はめったなことでは来ません。あなたの家に持に請われて蛇を捕えに来たのだ。」白婦人は許宣が蛇を捕えることを頼んだことを知ったので笑って「蛇は果して一匹いるが、唯、あなたが捕えることはできないと思います。」戴「私の祖先七八代は戴の蛇捕りということで有名である。これ程の小さな蛇をどうして捕えられないことがあろうか。」内の方には忽ち門が開いて「既に蛇捕りに会ったからにはどうかお入りなさい。」戴さんは僅かに入口の幕をかき開いて入って部屋の入口を見た、ところが忽ち一陣の冷風が起り、ひっきりなしに吹いて人のむく毛が一本立ちになった。一匹のツルベ桶のような大きな蛇が現れて来た。見ると二つの眼は燈火の皿のようであって真直に自分の方を絶えず見ている。蛇捕り戴は突然見て驚いて後の方へ倒れた。硫黄の缶と薬を入れた瓶を残らず地上に投げだしてこなごなにこわした。かの蛇は血のような真紅な口を開いて雪のような牙歯をむき出してかもうとしたのを見て狼狽えて両親が二本の足より多く生んでくれなかったことを恨むように命からがら、堂の前に馳け出した。李慕事と許宣とが彼を迎えて「どんなにか、うまく捕えたか。」戴先生「此の前もらったお金を貴君にお返ししします。蛇が私を捕えようとした。妖怪をばどうして捕えられようか。危く私の命まで失いそうである。」頭さえも振り向かず一目散に走って行った。二人はお互に見あって手の下しようがない。やがて白婦人は許宣に「中にお入りなさいよ」と言って、「貴男はまあ大胆な人ですね。どうして此の蛇捕りをよんでこられたのですか。貴男は私に好意をもって慈悲の眼を寄せて下さい。若し私を好まれないなら、私は考がある。此の町の人々をまきぞえにして悲惨な最後を遂げさせますよ。」許宣はブルブル戦いて声をだせない。早速外の方へ逃げ出した。まっしぐらに清波門外に出て再三躊躇ったが、どうしょうもない。その時、金山寺法海禅師が「若し妖怪が再びつき纏うなら、お前は湖南浄慈寺に到り私を尋ねなさいと言いつけたことを思い出した。今や夢中になって此処まで来てどうして彼にお願いせずにおられようか。まっすぐに浄慈寺に来て急

いで執事僧に問うた。「法海禪師はもうお寺に出られましたかと。」執事僧「まだいらっしゃいません。」と、許宣は不在ときいて家に帰る気にもなれず、あせり気味になって、その足で長橋に来て湖の奇麗な水を見て、「一層のこと死んでしまった方がよいではなかろうか。累を他人に及ぼすことがないから。」身を躍して川に飛び込まんとした時に、後に人がいて「男子がどうして命を軽んずるのか、用件があるなら、相談すればよいではないか。」許宣が振向いてみれば、これは正しく法海禪師である。身に衣鉢を纏い手に禪杖を携え、丁度よい機会に通りかかった。許宣は頭を低くして、「私の一命を救い下さい。」禪師「この畜生め、今何処におるか。」許宣「現在、兄夫婦の家におります。」禪師は鉢を取り出して許宣に与えた。「お前はこっそりと家に帰り、婦人にガンつかせてはいけない。此の鉢をば頭にきせ、決して手軽くするな。堅く圧さえつけ驚き慌わててはならぬ、私に考えがあるから。」許宣は禪師に謝して家に帰った。折しも白婦人は丁度そこで罵り当り散らしている。許宣は目をぬすんで、彼女の背後に近かより、ぬき足さし足で鉢をば白婦人の頭の辺りに往き、ひとおさえして、あるだけの力を出して頭の上から下の方へ抑えた。漸次おさえつけて床まで届くまで圧えた。とうとう白婦人の形が見えなくなってしまった。その後、手を緩めずしっかとおさえた。その時、盂の中で叫んで「私と貴男とは数年間夫婦となり、それなのに何を苦しんで私を気絶させてしまうのか、もう少し手を緩めて欲しい、やはりこれも夫の情ではないか。」というのが聞えた。許宣は如何とも処置の方法がない。俄かに「外に一人の和尚があり、妖怪を受取りに来ておられますと」と知らせた。

許宣は急いで李慕事を中へ招いた。禪師は中に入り、許宣に、「妖蛇を圧えつけているか、どうか。」許宣「先生どうか処置していただきたい。」禪師の口に何を唱えるかわからないが、唱え終ると鉢を上の方にあげると意外にも白婦人は縮まって七八寸の長い傀儡のように地下に伏しているのを発見した。禪師は一喝して、「これは何という畜生か、どうして、ひつこく付き纏うのか、詳しく委細申せ。」白婦人「私はもと一匹の大蛇で風雨の激しく起った時に乗じて西湖に来り、青魚と一緒に住んでいたが、許宣と遇うなどとは思いもよらなかった。ところが春情ムラムラと起りおさえきれず、天の条理を犯したが、幸にも生命を傷けたり害したことはなかった。お願いです。どうか慈悲を垂れ給え。」禪師「淫罪は最も悪い、元来許すべからざるものであるが、マア千年の修練を念うて僅かに一死は許してやる。早く本体を現わせ。」白婦人はそこで一匹の白蛇となり、青児は一匹の青魚となった。

白蛇は尚頭をもたげて許宣をみつめた。禪師はそこで二怪物をば鉢盂の中に入れ、一つの襠袢を引きはづし、鉢盂の口を封じた。雷

峰寺前に持参し、鉢盂をば置いた。そこで人をして煉瓦や石を運んで塔をこしらえさせ、その上を圧えた。後日許宣は喜捨を募り七層とした。後世永く白蛇と青魚が世に出ないようにせしめた。禅師は自ら鎮圧して次の四句を書き留めて、「雷峰塔倒れ、西湖の水枯れ、江潮起らず、白蛇世に出づ」[33] 法海禅師は頌し終わると大衆は礼をして去った。許宣は心から出家を願い出た。法海禅師を拝して先生となし、雷峰塔下に出家し修行すること数年、或夕、病気でないのに、坐ったまま遷化した。

衆僧は仏龕を買い骨を焼いた。骨塔を雷峰の下に造った。怪蹟は記録するに足らないが、雷峰はこれより、名を西湖のほとりになし、雷峰塔を景仰した。その怪事の跡を弔うねばならぬ。

注(1) 子不語怪力乱神（論語・述而）
(2) 雷峰塔…杭州西湖畔にあった高塔、民国十三年秋倒潰。
(3) 排行小乙…排行は兄弟長幼の次序、小乙は末子。
(4) 幕事…官名
(5) 表叔…祖父の姉妹の子にして年下（父の従弟に当る）の者。
(6) 主管…番頭・掌櫃。
(7) 清明節…（陰暦四月上旬）、祖先の墓に詣ずる風習がある。
(8) 箋子…祭祀をする際、紙で車馬什器金銭等の型を作って焼く。箋子とは此物の名の方言。
(9) 四聖観…黄帝・岐伯・秦越人・張機を祭った道教の廟
(10) 戴孝…孝は喪服のこと、婦人が喪章として頭髪を白布で結んでいるのを戴孝という。
(11) 万福…膝を折り左手の指を屈し其上に右手を重ね左乳の辺に当てる婦人の敬礼。
(12) 白三…班白殿直白は姓、三班は宋時の武官名、殿直は宋時宮廷に侍値する武官の名。
(13) 翻来覆去…幾度も寝返りを打つこと。
(14) 東不是西不是…何事も手に着かない。
(15) 楼房…二階三階家
(16) 府上…貴宅（自分の主人の家だから）
(17) 五十両一個元宝　五十両（両は十匁）の目方ある一個の馬蹄銀貨、元宝は銀の名。
(18) 打点停当…打点は準備する。仕度する。停当は整う。
(19) 壊鈔…散財する、壊は費す。鈔は紙幣の意であるが、単に銭の意にとってもよい。
(20) 財礼…結納に送る金銭
(21) 活見鬼…正気で幽霊を見る。有り得ない馬鹿げた話だということ。
(22) 有甚利害…甚は甚麼に同じ、何の恐しいことがありましょうか。
(23) 咯抖抖的発戦…ガタガタと顫える。

(24) 皂快…皂班と快班、皂班は牢獄の小役人、快班は捕手
(25) 重刑伺候…重き拷問の責道具を用意して控えている。
(26) 押司院…役所の名
(27) 搶殺人　男を追って此処まで来ながら嫉われると今更羅しい。殺は極まるの意
(28) 絲不成奴家没人要…まさか私は人に嫉われながら是非とも忍んで此処にをるなんてことができようか。
(29) 好胡説…随分馬鹿なことを言ったものた。好は甚の意。
(30) 只恨爹娘少生両隻脚…両親が足をもう二本附けておいて呉れなかった事を恨んだ。
(31) 催審…原告又は被害者が被告の処罰を当官憲に哀願する。
(32) 英烈龍王…水神の名
(33) 錢塘江の潮という。錢塘江の或部分は地勢の関係上潮水奔蕩頗る猛烈を極めている。特に陰暦八月十五日潮の干満の差が甚しい。

注　此の作品は上田秋成の雨月物語の「蛇性の婬」の種本である。私は先に前半を飜訳したが焼失したのでこの度全篇をここに飜訳して掲載することにした。